
分かる少女～こころ～

櫛田世紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

分かる少女〜こころ〜

【Nコード】

N2551D

【作者名】

櫛田世紀

【あらすじ】

ある事から出会った。霊の心を知る少女「こころ」と腕っ節の強い優しい猫好きの霊が見えるだけの少年宗太郎の死を見つめる物語。少年は少女に教えてもらい。少女は少年に救われる。

第一話 勇気付けられる猫〜大二郎〜

「暇ね・・・。」

女はこたつでミカンを頬張りながら暇をもてあましてた。

「外でも行つて来たら。」

少年はパソコンを弄り回している。

「私に凍死しろと!? バカいわないで。そんな事して、近所の小学生と遊んでいるうちに天に召されちまうわ! 暇だからあんたの部屋に遊びに来たのよ。」

立ち上がり少年の座るデスクに近寄る。

「何をしているの?」

「お前のHPを作ってるんだよ。」

女の中ではいろいろな想像をしていた。蝶仮面を装着した金持ち親父が番号札を持ちながら。「1億3000円!」と叫んでいる。

「私を売る気か! 1億3000円で何? 安くね?」

「そんなに高くないけど。まあ・・・そうなるね。」

「何か、メタボでブランド片手に葉巻吸ってるバスローブ着た親父のところに売るのが!」

「お前みたいな乳臭いガキが売れる分けないだろ。お前の特技を売り込むんだよ。」

「私にそんなテクニクは無いわ!」

少年には理解出来なかった。

「・・・? ところが何を言っているのか分からないけど。あれ何、霊能力か超能力だっけ? とりあえずお前の趣味で商売をしようかなって。」

「へ? ああ、別にいいけど。なら最初から言つてよ。小学生の私に、何てこと言わすの。」

「見た目はな、中身は艶っぱいけど。」

「色んなの見てたらこうもなるわ。大体、宗太郎が何も分からない

「だけよ。」

「俺にはわかんねえや。」

「私には分かるの。宗太郎の事を何でも。ある物に触れると分かるのよ。」

「こころはそういうと宗太郎の膝に乗っている小動物ぐらいの靄に触れた。」

「あー、昨日から何か居ると思ったら、3ヶ月前に行方不明になった猫の大二郎の霊か。そうか死んじまったのか……。ん、昨日？見るな。見ないでえええ！」

宗太郎が叫んだときには遅かった。こころが靄に手を触れた瞬間、彼女の全身の力がスツと抜けその場に倒れ。寝言を呟きだした。

「ん、はあ……。いひゃあ！こんなの始めて見た……。あんなの入るわけな！！って何これ冷たっ！宗太郎ね。こんなプレイしたかったらやらせて……。ひゃっ、すいません冗談です！だから氷増やすのやめてください。畜生……。覚えてろよ。起きたらただじゃすまさねえ！」

そして、こころの寝言は止まった。

「はっ！今のお前には何も出来まい。俺がいつの間にか冷凍庫から持ってきた氷を食らうしかないのだ！……。おっぱいも揉めるな。いや、俺は変体チックな近所のお兄さんじゃないんだ！」

等と言っているうちにこころはゆらりと起き上がった。

「フニャー！！！」

猫化したこころに強烈な猫パンチを食らった。その風貌はまさに猫娘だった……。

「ああ……。久しぶりの大二郎パンチだ。たまらねえぜ！」
そう言つて宗太郎の意識はとんだ。

翌日

川原で宗太郎はこころを後ろに乗せて自転車を走らせていた。

「さーむーいーよー。」

こころは齒をガチガチ言わせながらその言葉を連呼していた。

「お前が河川敷に行きたいって言うから来たんじゃないか。あと、胸が当たってる。」

「当ててんのよ。あれ、ここ……。そこの橋の下よ!」

橋の下にはダンボールやブルーシートできた家が並んでいる。

「ホームレスの住処じゃないか。あんな所に行つて危なくないか?」

「大丈夫、あそこに悪い人なんて居ないわ。」

こころは自転車から降りると橋の下に向かつて歩き出した。

「あ、おい!勝手に行くなよ。突っぱね返されるぞ。」

「追い返されるなんてとんでもない、宗太郎なら歓迎されるわ。誰か居る?」

一つの家から人が出てきた。

「おいガキども。うるせえぞ、いま飯食つてサブが寝付いたとこなんだ静かにしろ。」

「ガキとはひどい言われようね。」

「つて、こころちゃんじゃねーか。なんだ、引越しに来たか。はははは。」

おやじは豪快に笑う。こころとは親しいみたいだ。

「楽しそうだけどやめとくわ。私、寒いところは嫌いなよ。」

「こころちゃん遊びに来たの?寒いなら。その焚き火で暖まるといいわよ。あれ、その男の子はこころちゃんの彼氏?」

今度は隣の家から、女の子が出て来た。

「ち、つつがうわよ!いや、違うわ!」

「照れちゃってまー可愛い!」

こころに抱きつき頬ずりする。

「あーもー。暖かいからいいや!」

おやじはじーつと宗太郎の顔を見つめている。

「ああ、おめえあん時の坊主じゃねえか。」

「そ、宗太郎君よ。あの時こころちゃんを助けてくれた。」

「何、言つてんだ。りよう……。フガ!何すんだ!」

「父さん口に蚊がいたから・・・。」

「そうか。そうだ、お前も宗太郎に助けてもらったじゃねえか。」

「は？初耳よそんなの！」

女の子はわけが分からない様子だ。

「それどころか。ここにいる皆が宗太郎に助けてもらったんだぞ。」

あの、鉄パイプ1本で悪ガキ20人のめした姿はかつこよかったなあ。戦い方は姑息だったけどな。言ってなかったか。わははははは！」

「あーあの時のですね。思い出した。あの時ちょうど大二郎が居なくなつた時で探し回っていたんだ。そしたら女の子が拉致られそうになつて猫が虐められてたから助けたんだ。」

「そうだ！いま、おめえ大二郎って言つてなかったか？それだったらこれ・・・。」

おやじが家の中に入り何かを引つ張り出してきた。

「これは！」

親父の手にあるものは大二郎と書かれた首輪。

「わははは、おめえが飼い主だったか。あのときここに大二郎はいたんだよ。」

「それで、大二郎は！？」

「昨日、野犬に襲われてな。子供を守るため最期まで戦つて死んじまつた。墓がそこにあるだろ？」

「そうか・・・。花を摘んできます。」

悲しかった兄弟のような猫。大二郎が死んだのを昨日知つて大泣きした。大切な者が無くなる。これ以上にならない苦痛だった。

でも、己の子供のために命を捨ててまで戦つた大二郎の勇気がうれしかった。

「さてと、帰りましょうか。」

「そうだな。」

「宗太郎君。この子連れて帰る気ない？」

少女の両手には二匹の子猫が。

「そうしたいんだけど……。おやじさんが。」

「うおおおお！小三郎、大三郎元気でな！ちゃんとご飯食べさせてもらうんだぞ〜！」

泣きながら見送っている。

「あーいいのよお父さんてばこの子達見るのに寝てないのよ。このままじゃまずいからね。」

晴れ晴れとした青空。日が出て暖かい。

「ねえ、宗太郎。大二郎から伝言があるんだけど。」

「なに？どんなの。」

「あの時の人間共から嫁を助けてくれてありがとう。あそこで石を投げられ嫁が死んでいたらあの子達は生まれなかった。あの時逃げていた僕には、大勢の敵に立ち向かう宗太郎の姿が誇らしかった。おかげで僕も宗太郎のようにいかなかったが、最期は子供たちを見捨てずに敵に立ち向かえた。宗太郎と出会い一緒に暮らせて良かった。」

「最期まで人間くさい猫だな。」

俺はこころと大二郎に出会えたことが本当にうれしかった。

勇気をもらう猫〜大二郎〜 完

第一話 勇気付けられる猫〜大二郎〜（後書き）

読んでくれてありがとう！

あー、小説と言いがたいくらいめっちゃくちゃです。

勉強していきますんでよろしくお願いします。

第二話 愛されるのが遅かった少年〜二宮拓司〜

幼い頃は幸せだった。簡単な事を出来れば褒められた。入試に受ければ抱きしめ喜んでくれた。でも、この世界は意地が悪い。僕の価値を分からなくしてしまう。愛する両親を狂わせる。

「愛してるよ。」

それが、最後の言葉だ。

私は、ランドセルから水筒を取り出し。蓋を開ける。上についているカップを床に置き、透明な液体を注ぐ。さきイカと柿ピーも忘れずにランドセルから取り出す。寒いときには、これを飲むのが一番ね。

「宗太郎がいないと。ホント暇だわー。」

カップに注いだ液体を飲みながら、芋の風味をすっかり堪能していた。

暇つぶしには、「アレ」が一番楽しいのだけど。宗太郎がいなくてやること、何時かみたいに危険な目にあってしまうから、やらない。

「ふう、たまには芋もいいわね。」

私は、行くべき所にも行かず。数年後行くべきところの屋上で、芋飲んでいいのかしらね。

それが少しおかしくて鼻で笑った。

長い話が終わり下校時間になっていた。

「あーやつと終わった……。俺は少し悪いことすれば報復が来ると教えただけに。俺が悪者扱いされるとは。」

あの、野郎が自分でやったくせに被害者扱いだよ。

「いやあ……いくらなんでも、君が泣くまで殴るのを止めない！とか言いつつ。泣いても止めなかったし。藤盛屋君ママとか連呼してたよ。」

加藤良子が帰るのを待っていてくれたようだ。

「トイレで見たんだって。一年生が恐喝されてる所を。なのにアイツ本当のこと言わねーし。」

「でも、殴っちゃ駄目だよ。」

「最初は説得したさ。そしたら、藤盛屋のやつモップで殴りかかってきて。目潰しを投げてちょちよいと。」

「まあ、戦い方は卑怯だけど。そんな優しい宗太郎君が素敵なんだけどね。」

褒められたからうれしかった。

「しかし、男子トイレに女子連れ込んで金を巻き上げるヤツなんてどーせ怒られるなら、もつとやっておけばよかったかな……。」

「そ、それ違う。……生まれた事を後悔させても良かったんじゃない？」

「きゃっつほい！！！」

いきなり後ろから強烈な重みが。

「こころ！また勝手に忍び込んだな！」

「だって。暇なんだもん。」

俺の背中にしがみつき、強烈なおいを出していた。

「お前、アルコール臭いぞ！」

「飲んでないわよ。ちよつと理科の授業中にエタノールぶっかけられただけよ。」

「相変わらず仲良しねー。このロリコン鈍感男。」

加藤は微笑みながらも、顔に似合わない毒を吐いた。

「あー眠いわ。私寝る。」

大きなあくびをした後、俺の背中で眠りについた。

「あ、おい起きろ。家に帰ってから寝ろ！」

「駄目だね。完璧に酔ってるよ。これは家まで送ってあげるしかない

いね。」

「あーもうしょうがねえ奴だな。」

「送り狼にならないようにね?」

加藤がニヤニヤしながら言っているが、意味が分かん。

「送り狼って何だ?」

「カマトトぶってんじゃねーわよ!」

怒られた。

「頭痛い……。」

「お前みたいな小学生探しても二人と居ないだろうな。」

メーラーを起動して黄色で書かれた新着メールの文字を見ていく。
大体はダイレクトメールだ。

「ごめん。宗太郎がいなくて暇だったのよ。」

「だからってそれは良くないだろ!」

「じゃあ宗太郎が授業サボればいいのよ!」

「無理言うな!」

ところがパソコンのほうをじーつと見つめてる。

「ん。少年エロサイトか?思春期満開か?私というものが居ながら
二次元か。このロリコンやろう!電腦の海に消えちまえ!」

「エッチなのはいけないと思うから。見ないよ。あーほれついに来
たぞ。」

新着メールを開いた画面を指差す。

「戦闘兼家政婦専用アンドロイドみたいな事を抜かしつつ。その指
で……私を犯るのか!というのは冗談で、どれどれ?」

「戦闘兼家政婦専用アンドロイドって何だよ?」

「側頭部から髪の毛がみょんとでた家政婦よ。知らないなら知らないで
もいいのよ。めんどくさいからメール読んで。」

「HP見ました。」

私には一人の息子が居たのですが……。

一年前に遺書も残さず自殺しました。

どうかお願いします。息子が何を思って死んだのかを息子から聞いてください！

だって。ちょうど明日は土曜日で休みだ、どうする？」

「息子が死んで、まだこの世に居ると思いたい親か……。やりましょう。」

「なあ。現に残っているじゃないか。大二郎の霊のときみたく。」

「それは、宗太郎が主観的になりすぎてるだけ。普通の人ならHP見ただけで嘘だと思うわ。よほど、その子から理由を聞きたいのね。」

たしかに、普通ならいんちき臭く思うだろうな。子供の死は親も狂わせるってか。

「なら。OKのメールを出すぞ。」

ご依頼、ありがとうございます。

以下の必要な情報をいただければ、即調べに行きます。

息子さんがお亡くなりになられた場所。

息子さんのお亡くなりになられた時の特徴（身長、髪型、格好、体格）

名前と家族構成は息子さんから聞きますので結構です。

翌日

「何ここ霊がいっぱい居るじゃない！これじゃ特定できないじゃない。い。」

寂しげな廃ビルには大量の霊がいた。

「寂しいのは廃ビルじゃなくて。ここにいる人たちかもな。」

「詩的なこと言っていないでどうするの。一人づつ見て行けって言うの！？」

「そんなことしたら日が暮れるよ。だから、特徴を聞いたんだろ？」

「あんなサウンドノベルの人物みたいなの見分けつくわけ無いでしょ！」

「実は、よく見るとな、その人がどんな姿だったか見えるようになったんだ。」

だから、この商売を始めようと思ったんだ。

「なに？その特技私そんなの持ってるわよ！」

「でも、この量は半端じゃないな。こころ気をつけて歩けよ？少し触れただけで読み込んだらうぞ。」

「分かってるわよ。両手を隠せば問題ないわ。」

エントランスに入りあたりを見回す。

一流企業だったのか高そうな絵が並び豪華なインテリアが並んでいる。

「あの、絵とか持ち帰って売れば金になんねーかな・・・？」

「それは、犯罪よ。ここに入り込んでるのもだけど。でも、それ皆贋作で価値は無いわよ。価値があるなら倒産したときに皆持つてくわよ。」

「贋作？まあ用は金になんないのか。」

エレベーターは・・・さすがに動かないか。

「階段しかないわね。」

「そこにF1でプレートに書いてあるドアがあるぞ。アレじゃね？」

「宗太郎、ちよつとしゃがんで。」

「ん、ああ。何でだ？」

とりあえずしゃがむ。急にこころが背中に抱きついた。

「よっしゃ。レッツゴー、がんばれ宗太郎！」

「歩けよ！畜生、やってやるぜ！」

階段を駆け上るそれはもう苦痛だった。

屋上に着いたらなんて叫ぼう。

いいよな、これは言っちゃても。

やった、屋上だ！

「エ．．．．！」

「エーイドーリアーン！！！」

ここに横取りされた。

「今、すごく泣きそうになった。」

「ごめん．．．。」

本当に申し訳なさそうだった。

すぐ立ち直って。ゴールの扉をここに開けられた！

「畜生！」

「あ、いやなんだがよく分からないけどホントごめん！」

「屋上に霊は居ないな。」

「しかし高いわね。30階くらいあるんじゃないの？」

「屋上のくせにやけに広いし。」

「あそこに何か居るわ。」

「あーホントだ．．．。体育座りしているぞ。」

「宗太郎の聞いた特徴とあってる？」

お坊ちゃんへアーで顔にほくろ1つ、やや肥満気味。

「ばつちりだ。」

「じゃあ、はじめるわ．．．。」

こころが両手で少年の頭に触れる。その場に倒れる。

あーそうだ起きたら、その人間になりきるんだ。ということとはだ、このまま放置したらこいつになりきって飛び降り．．．。

「らめえええ！落ちちゃう！」

とりあえず、こころの両手両足をロープで縛っておきました。

こころの寝言が始まった。

「ちよつと、手首とか足首が痛いんだけど何かした？集中したいから邪魔しないで。ってこいつかなり病んでるわね。ちよつ、やめなさい！」

こころの寝言が終わった。

「こころ！大丈夫か？」

頬をペシペシ叩く。

「目を覚まさせなきゃ。死ねば僕は愛され悲しんでくれる。」

「こーこーろ、目を覚ますのはお前だ!」

「っつ。あー怖かった。この恐怖がたまらなくいいのよ。ってこのロープ何!? ついにやる気か! でも、宗太郎ならいいよ。」

「良かった、戻ったか。」

「ここを縛ったロープを解く。」

「何で解くのよ! このままがつといけよ! 畜生、ぐれてやる!」

「十分ぐれてるよ……。」

「でも、どーせ受験勉強で疲れてましたーって話だろ?」

「そうね。愛が確かめたかっただけ。死ぬことによつて悲しんでくれるなんて分かっていた。でも、それが純粹に愛する者が死んだことによる悲しみなのか。親が老後のあてにしていた者が死んだことによる悲しみか。知りたかったのね。本人は当たり前だけど前者を強く願っていたけどね。」

「親から愛されているか分からない可哀想な奴もいるもんなんだな。何か、両親に伝えたい事ってあったか?」

「ええ。「生まれてよかった。愛してる。」と。」

「へ。それだけ?」

「死んでから両親の気持ちが分かったみたいね。」

「俺も愛されているか試したくなるときが来るのかな……。」

「それは、大丈夫。だって私が愛してるもの。」

「そうか、それは安心だ。」

「脈なしかよ! この、鈍感ロリコン野郎!」

第2話愛されていた受験生(拓司)

第二話 愛されるのが遅かった少年〜二宮拓司〜（後書き）

ストーリーの肝心なところが出始めました。

まだまだ続くんでよろしくお願いします。

感想・おかしいところがあれば指導してください。

全部おかしいってのは勘弁してください・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551d/>

分かる少女～ころ～

2010年10月28日08時55分発行